輕雋
秀潤

菊池寛
高松市の人、明治二十二年生、小説家。

その人となりを異にするに隨うて、文もまた高雅・輕雋・秀潤の差あれども、倶に一代の粹たるを失はず。元祿の文壇國學に儒學に豪傑の士乏しからざりしも、この三人微りせば、その落莫想ひ見るべきなり。

一八　恩讐の彼方に（自修文）

菊池寛

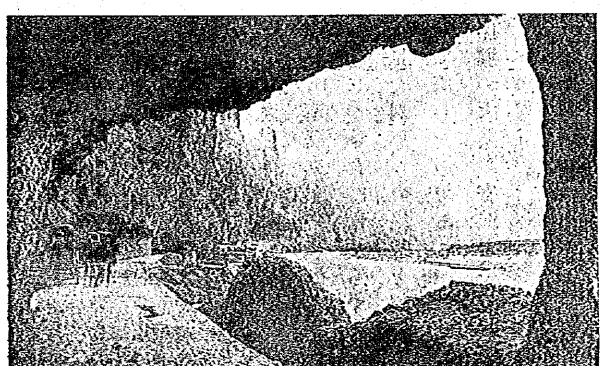
少しの事の行違から、主人中川三郎兵衛を討つて江戸表を逐電した市九郎は捨鉢の氣分と窮迫とに、ずるずると惡の深みに引きずり込まれ、たうとう切取强盜に何の躊躇も不安も感じない程の惡人になりきつた。

かうした生活に沈んでから三年目の春、伊勢參宮の若い夫婦連の旅人を殺したことから、ふと今までの一切のあさましさ恐ろしさが一團になつて彼の良心を襲うた。内から良心の白光に照されて、寸刻も居

たゝまれなくなつた彼は、道でない道をひた走りに走つて、ゆくりなくも大垣在の淨願寺といふ大寺の門に立つた。そして現住明逼上人に、必死の敎化を求めて、心からの懺悔をした。上人は市九郎が有司の許へ自首しようといふのを止めて、寧ろ佛道に歸依して、衆生濟度の爲に自命を捨て諸人を救ふと共に汝自身を救へ。」と敎化した。

彼は得道して法名を了海と呼ばれ、勇猛精進すること半歲餘、道心堅固の自覺を得て、諸人救濟の大願を起し、諸國雲水の旅に上つたのであつた。享保九年の秋筑紫に渡り、山國川を溯つて羅漢寺へと志し、樋田の驛についた時、はからずこゝの絶壁鎖の渡の難所で、馬方の非業の死を見た刹那、この絶壁を刳貫いて道を通じようといふ大誓願が、勃然として萌したのである。彼は直に山國川に沿うた村へと勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めたのであつた。

市九郎は一月にも近い間勸進に努めたが、何人も耳を傾けぬ



青の洞門

のを知ると、奮然として獨力此の大業に當ることを決心した。彼は石工の持つ鎚と鑿とを手に入れると、自分たつた一人で、此の大絶壁の一端に立つた。それは一箇の諷刺畫であつた。けづり落し易い火山岩であるとは云へ川を壓して聳え立つ峨々たる大絶壁を、市九郎は自分一人の力で刻貫かうとするのであつた。

「到頭氣が狂つた」

と、行人は市九郎の姿を指しながら嗤つた。

併し市九郎は屈しなかつた。山國川の清流に沐浴して、觀世音菩薩に祈誓を籠めた後、渾身の力を籠めて、第一の鎚を下したのである。が、夫に應じて、たゞ二三片の碎片が飛散つたばかりであつた。再び力を籠めて第二の鎚を下した。更に二三片の小塊が巨大なる無限大の大塊から分離したばかりであつた。市九郎は少しも失望しなかつた。第三・第四・第五と彼は懸命に鎚を下した。空腹を感ずれば近郷を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向つて鎚を下した。懈怠の心が生ずれば、眞言を唱へて勇猛の心を振ひ起した。一日・二日・三日、市九郎の努力は間斷なく續いた。旅人はその傍を通る度に、嘲笑の聲を送つた。が、市九郎の心は、その爲に須臾も撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に鎚を持つ手に力を籠めた。

やがて市九郎は雨露を凌ぐ爲に、絶壁に近く木小屋を建てた。

山國川　豐前國下毛郡高瀬川の上流で耶馬溪の奇勝をなしてゐる。

觀世音菩薩　世間の苦惱の音を觀じて、大慈悲を垂れるといふ菩薩。

托鉢　僧尼が鉢を持つて米錢を乞ふこと。

眞言　眞言宗の呪文。

須臾　しばらくの間。

嗤笑　あざけりのわらひ。

欣求　眞心からのねがひ。

朝は山國川の流が星の光をうつす頃から起出で、夕は瀨鳴の音が寂靜の天地に澄みかへる頃迄も、鎚を振る手を止めなかつた。が、行路の人々は嗤笑の言葉を止めなかつた。

「身の程を知らぬたわけぢや。」

と、市九郎の努力を眼中に置かなかつた。が、市九郎は一心不亂に鎚を振つた。鎚を振つて居さへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺した悔恨も、其處に無かつた。極樂に生れようと云ふ欣求もなかつた。たゞそこに晴々した精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以來、夜毎の寢覺に、身を苦しめた自分の惡業の記憶が、日に薄らいで行くのを感じた。彼は益、勇猛の心を振ひ興して、一向專念に鎚を振つたのである。

新しい年が來た。春が來て、夏が來て、早くも一年が經つた。市九郎の努力は空しくはなかつた。大絕壁の一端に深さ一丈

精進　心を專にして修行すること。

如法　經說の理法にかなふこと。

に近い洞窟が穿たれて居た。それはほんの小さい洞窟ではあつたが、市九郎の强い意志は最初の爪痕を明に止めて居た。

「あれ見られい。狂人坊主があれ丈掘り居つた。一年の間、もがいて、たつたあれ丈ぢや。」

と嗤つた。が、市九郎は自分の掘り穿つた穴を見ると、涙の出るほど嬉しかつた。それはどんなに淺くとも、自分が精進の力の、如實に現れて居るものに相違なかつた。又一年が經つた。市九郎は年を重ねて、更に振ひ立つた。夜は如法の闇に、晝も尙薄暗い洞窟の裡に端坐して、たゞ右の腕のみを、狂氣の如くに振つて居た。市九郎に取つて右の腕を振る事のみが、彼の宗教的生活の總べてになつてしまつた。洞窟の外には、日が輝き、月が照り、雨が降り、嵐が荒んだが、洞窟の中には間斷なき鎚の音のみがあつた。

二年の終にも、里人は尙嗤笑を止めなかつた。が、夫はもう聲に迄は出て來なかつた。たゞ市九郎の姿を見た後、顏を見合せて、互に嗤ひ合ふだけであつたが、更に一年經つた。市九郎の鎚の音は山國川の水聲と同じく不斷に響いて居た。村の人達はもう何とも云はなかつた。彼等が嗤笑の表情は、何時の間にか驚異のそれに變つて居た。市九郎は長い間梳らない爲に、頭髮は何時の間にか伸びて雙肩に掩ひかゝり、浴せざれば垢つきて、人間の姿とも見えなかつた。彼は自分が掘穿つた洞窟の裡に、獸の如く蠢きながら、狂氣の如くその鎚を振ひつゞけて居たのである。

里人の驚異は何時の間にか同情に變り始めて居た。市九郎が暫しの暇を窃んで、托鉢の行脚に出かけようとすると、洞窟の出口に思ひがけなく、一椀の齋を見出すことが多くなつた。市

行脚　徒歩にて諸國を旅すること。
齋　僧家にて食事の稱。

九郎はその爲に托鉢に費すべき時間を更に絕壁に向ふ事が出來た。

四年目の終が來た。市九郎の掘穿つた洞窟は、もはや五丈の深さに達して居た。その三町を超える絕壁に比ぶれば、それは物の數でもなかつた。里人は市九郎の熱心に驚いたものの、未だかくばかり見えすいた徒勞に合力するものは一人もなかつた。市九郎はたゞ獨りその努力を續けねばならなかつた。が、もう掘穿つ仕事に於て、三昧に入つて居た市九郎は、たゞ鎚を振ふ外は何の存念もなかつた。土鼠のやうに命の有るかぎり掘穿つて行く外には、何の他念もなかつた。彼は只一人默々として掘進んだ。洞窟の外には春が去つて秋が來て、四時の風物が移り變つたが、洞窟の中には不斷の鎚の音のみが響いた。

「可哀さうな坊樣ぢや。物に狂つたと見え、あの大磐石を穿つ

三昧　心を一事に集中して亂さないこと。

て行くは、十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終らうものを。」と、行路の人々は市九郎の空しい努力を悲しみ始めた。が、一年經ち、二年經ち、丁度九年目の終に、市九郎の穿つた穴は入口より奥迄二十二間を計る迄に掘進んで居た。

樋田郷豊前國下毛郡山國谷の字。

樋田郷の里人は、始めて市九郎の事業が可能であるのに氣が付いた。一人の痩せはてた乞食僧が、九年の力でこれ迄掘穿ち得るものならば、人を増し、歳月を重ねたなら、此の大絶壁を穿ち貫ぬく事も、必ずしも不思議な事ではないといふ考が、里人等の胸の内に銘ぜられて來た。九年前、市九郎の勸進を擧つて斥けた山國川に沿ふ七郷の里人は、今度は自發的に開鑿の寄進に附き始めた。數人の石工が市九郎の事業を援ける爲に雇はれた。もう市九郎は孤獨ではなかつた。岩壁に下す多數の鎚の音は勇ましく賑やかに、洞窟の中から洩れ始めたのである。が、翌年

になつて里人達が工事の進め方を測つた時、それがまだ絶壁の四分の一にも達して居ないのを發見すると、彼等は再び落膽疑惑の聲を洩らした。

「人を増しても、とても成就はせぬ事ぢや。あたら了海どのに騙されて入らぬ物入をした。」

と、彼等は捗取らぬ工事に何時の間にか倦み始めて居つた。市九郎は又獨り取殘されねばならなかつた。彼は自分の傍に鎚を振る者が一人減り、二人減り、遂には一人も居なくなつたので氣が付いた。が決して去る者は追はなかつた。默々として自分一人その鎚を振ひ續けて行くのであつた。

里人の注意は全く市九郎の身邊から離れてしまつた。殊に洞窟が深く穿たれゝば穿たれるほど、その奥深く鎚を振ふ市九郎の姿は、行人の眼から遠ざかつて行つた。人々は闇の裡に閉

沒交渉　無關係。

不退轉　屈せないこと。

された洞窟の中を透しながら、

「了海さんは、まだやつて居るのかなあ。」

と、疑つた。　が、さうした注意もしまひには段々薄れてしまつて、市九郎の存在は里人の念頭から屢、消失せようとした。　が、市九郎の存在が里人に對して沒交渉である如く、里人の存在も亦市九郎に沒交渉であつた。　彼にはたゞ眼前の大岩壁が存在するばかりであつた。

市九郎は洞窟の中に端坐し始めてから、もはや十年にも餘る間、暗い冷たい石の上に坐り續けて居た爲に、顏は蒼ざめ、雙の眼は窪んで、肉は落ち骨は露れ、此の世に生けるものゝ姿とも見えなかつた。　が、市九郎の心には、不退轉の勇猛心が頻りに燃えさかつて、たゞ一念に穿ち進む外には、何物もなかつた。　一分でも一寸でも、岩壁の削り取られる毎に、彼は歡喜の聲を揚げた。

市九郎はたゞ一人取殘されたまゝに、又三年を經た。　すると、何時の間にか里人達の注意は、再び市九郎の上に歸りかけて居た。　彼等がほんの好奇心から洞窟の深さを測つて見ると、全長六十五間、川に面する岩壁には、採光の窓が一つ穿たれ、もはや此の大岩石の三分の一は、主として市九郎の瘠腕に依つて貫ぬかれて居る事が判つた。

彼等は再び驚異の眼を刮いた。　過去の無智を恥ぢた。　市九郎に對する尊崇の心が再び彼等の心に復活した。　やがて、寄進された十人に近い石工の鎚の音が、再び市九郎のそれに和した。

又一年經つた。　一年の月日が經つ裡に、里人達は何時かしら目先の遠い出費を悔い始めて居た。　寄進の人夫は、何時の間にか一人減り二人減つて、おしまひには市九郎の鎚の音のみが、洞窟の闇を打顚はせて居た。　が、傍に人が居ても居なくても、市九

剽賊　おどし盜むこと。

奇蹟　不思議なこと。のあつたあと。

郎の鎚の力は變らなかつた。彼はたゞ機械の如く渾身の力を入れて鎚を擧げ、渾身の力を以て之を振降した。彼は自分の一身をさへ忘れて居た。主を殺した事も、剽賊を働いたことも、人を殺したことも、總べては彼の記憶の外に薄れてしまつて居た。

一年經ち二年經つた。一念の動くところ、彼の痩せた腕は鐵の如く屈しなかつた。丁度十八年目の終であつた。彼は何時の間にか岩壁の二分の一を穿つて居た。

里人は此の恐ろしき奇蹟を見ると、もはや市九郎の仕事を少しも疑はなかつた。彼等は前二回の懈怠を心から恥ぢ、七郷の人々が合力の誠を盡して、擧つて市九郎を援け始めた。その歳中津藩の郡奉行が巡視して、市九郎に對して賞美の言葉を下した。近郷近在から三十人に近い石工が蒐められた。工事は枯葉を燒く火のやうに進んだ。

棟梁　おもだつもの。かしら。

人々は衰殘の姿いたゞしい市九郎に、

「もはや、そなたは石工どもの棟梁をなさりませ。自ら鎚を振ふには及びませぬ。」

と勸めたが、市九郎は頑として應じなかつた。彼は殘るれば、鎚を握つたまゝ殘れたいと思つて居るらしかつた。彼は三十の石工が傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れて懸命の力を盡すこと、少しも前と變らなかつた。が、人々が市九郎に休息を勸めたのも、無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奥深く、坐り續けた爲であらう。彼の兩脚は永い端坐に傷み、何時の間にか屈伸の自在を缺いて居た。僅の歩行にも杖に縋らねばならなかつた。

その上、長い間闇に坐して日の光を見なかつた爲であらう。また不斷に彼の身邊に飛散る碎けた石の碎片が、その眼を傷つ

あいろ

けた爲でもあらう。彼の兩眼は朦朧として光を失ひ、物のあいろも辨へかねるやうになつて居た。

さすがに、不退轉の市九郎も、身に迫る老衰を痛む心はあつた。身命に對する執着はなかつたけれど、中道にして殪れることを何よりも無念と思つたからである。

「もう二年の辛抱ぢや。」

と、彼は心の裡に叫んで、身の老衰を忘れようと、懸命に鎚を振ふのであつた。

一方、市九郎のために非業の横死を遂げた中川三郎兵衛の一子實之助は、復讐の一儀を肝深く銘じ、十九の時報復の旅に上つたのである。

漂泊の旅路に年を送り年を迎へて二十七歳の春、江戸を立つてから丁度九年目、九州に渡つて、一日宇佐八幡の茶店に憩うて、聞くともなく聞いた世間話から、はしなくも永年夢にも忘れられない怨敵が樋田の

打算　勘定すること。見積ること。

刎貫にあることを知ると、必死の力を雙脚にこめて敵の在處へと急いで了海に對面を求めた。

了海は、當然の罪業の報として、主人の遺兒實之助の刃に潔よく斃れることを願つて、そこに身を投げ出したのであつた。

實之助は此の半死の老僧に接して居ると、親の敵に對して懷いて居た憎しみが、何時の間にか消失せて居るのを覺えた。敵は父を殺した罪の懺悔に、身心を粉に碎いて、半生を苦しみ拔いて居る。而も自分が一度名乘りかけると、唯々として命を捨てようとして居るのである。かゝる半死の老僧の命を取ることが果して復讐であらうかと、實之助は考へたのである。が、併し此の敵を討たない限りは、多年の放浪を切上げて江戸へ歸るべきようすがはなかつた。まして家名の再興などは、思ひも及ばぬ事であつたのである。實之助は憎惡よりむしろ打算の心から、

容赦　ゆるすこと。赦宥すること。

此の老僧の命を縮めようかと思つた。が、烈しい憐ゆるが如き憎悪を感ぜずして、打算から人間を殺すことは、實之助に取つて忍びがたい事であつた。彼は消えかゝらうとする憎悪の心を勵ましながら、討ちがひなき敵を討たうとしたのである。

その時であつた。洞窟の中から走り出て來た五六人の石工は、市九郎の危急を見ると、驚いて彼を庇ひながら、

「了海様を何とするのぢや。」

と、實之助を咎めた。彼等の面には仕儀に依つては許すまじき色があり〳〵と見えた。

「仔細あつて、その老僧を敵と狙ひ、端なくも今は廻り逢うて本懷を達するものぢや。妨げ致すと、餘人なりとも容赦は致さぬぞ。」

と、實之助は凜然と云つた。が、その中に石工の數はふえ、行路の

持地菩薩　地藏菩薩のこと。

沙門　出家。僧。

人々が幾人となく立止つて、彼等は實之助を取卷きながら、市九郎の身體に一指をも觸れさせまいと銘々に敦圉き始めた。

「敵を討つ討たぬなどは、夫はまだ世に在る中の事ぢや。見らるゝ通り了海どのは、染衣薙髪の身である上に、此の山國の鯰七郷の者に取つては、持地菩薩の再來とも仰がれる方ぢや。」

と、その中のある者は、實之助の敵討を叶はぬ非望であるかのやうに云張つた。

かう周圍の者から妨げられると、實之助は敵に對する怒は何時の間にか蘇つて居た。彼は武士の意地として、手を拱いて立去るべきではなかつた。

「たとひ沙門の身であらうとも、主殺しの大罪は免れぬぞ。親の敵を討つ者を妨げ致す者は、一人も容赦はない。」

と、實之助は一刀の鞘を拂つた。實之助を圍ふ群衆も皆悉く身

構へた。すると、その時に市九郎はしわがれた聲を張上げた。

「皆の衆お控へなさい。了海討たるべき覺え十分御座る。此の洞門を穿つことも、たゞその罪滅しの爲ぢや。今かゝる孝子のお手にかゝり、半死の身を終る事、了海が一期の願ぢや。皆の衆妨げ無用ぢや。」

かう云ひながら、市九郎は身を挺して、實之助の傍にゐざり寄らうとした。かねゞ〳〵市九郎の強い意志を知りぬいて居る周圍の人々は、彼の決心を飜すべき由もないのを知つた。市九郎の命は、茲に了るかと思はれた。その時に石工頭が實之助の前に進み出でながら、

「御武家樣もお聞き及びでもござらうが、此の刳貫は了海樣一生の大誓願で、二十年に近い御辛苦に身心を碎かれたのぢや。いかに御自身の惡業とは云へ、大願成就を目前に置きながら、お

竣功　でき上ること。

果てなさるゝこと如何ばかり無念であらう。我等の擧つてのお願ひは長くとは申さぬ、此の刳貫の通じ申す間、了海樣のお命を我等に預けては下さらぬか。刳貫さへ通じた節は、卽座に了海樣を存分になさりませ。」

と、彼は誠を表して哀願した。群集は口々に、

「ごとわりぢや〳〵。」

と賛成した。

實之助もさう云はれて見ると、その哀願を聽かぬ譯には行かなかつた。今此處で仇を討たうとして、群集の妨害を受けて不覺を取るよりも、刳貫の竣功を待つたならば、今でさへ自ら進んで討たれようと云ふ市九郎が、義理に感じて首を授けるのは必定であると思つた。又さうした打算から離れても、仇とはいひながら此の老僧の大誓願を遂げさせてやるのも、決して不快な

ことではなかつた。實之助は市九郎と群集とを等分に見ながら、

「了海の僧形にめでて、その願許して取らさう。ちかつた言葉を忘れまいぞ。」

と叫んだ。

「念もないことで御座る。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の刻貫が向側へ通じた節は、その場を去らず了海樣を討たせ申さう。それ迄はゆる〳〵と、此の邊に御滯在なされませ。」

と、石工頭は穩な口調で云つた。

市九郎は此の紛擾が無事に解決が付くと、それに依つて徒費した時間が如何にも惜しまれるやうにじりながら洞窟の中へ這入つて行つた。

實之助は大切の場合に思はぬ邪魔が入つて、目的が達し得な

念もないこと勿論。

紛擾

かつたことを憤つた。彼は如何ともし難い憤憤を抑へながら、石工の一人になつて考へると、仇を目前に置きながら、討得なかつた自分の腑甲斐なさを、無念と思はずには居られなかつた。

自分一人になつて考へると、仇を目前に置きながら、討得なかつた自分の腑甲斐なさを、無念と思はずには居られなかつた。彼の心は何時の間にか焦立たしい憤で一杯になつて居た。彼はもう刻貫の竣成を待つと云ふやうな、敵に對する緩な心を全く失つてしまつた。彼は今宵にも洞窟の中へ忍び入つて、市九郎を討つて立退かうと云ふ決心の臍を固めた。が、實之助が市九郎の張番をして居るやうに石工達は實之助をそれとなく見張つて居た。

最初の二三日を心にもなく無爲に過ごしたが、丁度五日目の晩であつた。毎夜の事なので、石工達も警戒の眼を緩めたと見え、丑近い頃には、何人も深い眠に入つて居た。實之助は今宵こ

そと思ひ立つた。彼は瓦破と起上ると、枕許の一刀を引寄せて、靜に木小屋の外に出た。それは早春の夜の月が冴えた晩であつた。山國川の水は月光の下に蒼く渦卷きながら流れて居た。が、かうした周圍の風物には眼もくれず、實之助は足を忍ばせて、竊に洞門に近づいた。削り取つた石塊が、所々に散らばつて、歩を運ぶ度毎に足を痛めた。

洞窟の中は入口から來る月光と、所々に刳りあけられた窓から射し入る月光とで、所々ほの白く光つて居るばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探り〳〵奥へ〳〵と進んだ。

入口から二町許りも進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、くわつくわつと間を置いて響いて來る音を耳にした。彼は最初それが何であるか判らなかつたが、一歩進むに隨つて、その音は擴大して行つて、おしまひには洞窟の中の夜の寂靜の裡にこだます

る迄になつた。それは明に岩壁に向つて鐵鎚を下す音に相違なかつた。實之助はその悲壯な凄みを帶びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近づくに隨つて、玉を打碎くやうな鋭い音は、洞窟の周圍にこだまして、實之助の聽覺を猛然と襲つて來るのであつた。彼は此の音をたよりに這ひながら近づいて行つた。此の鎚の音の主こそ敵了海に相違あるまいと思つた。私に一刀の鯉口を寛げながら、息を潛めて寄添うた。その時ふと彼は鎚の音の間々に囁くが如く、うめくが如く、了海が經文を誦する聲を聞いたのである。

そのしわがれた悲壯な聲が、水を浴びせるやうに實之助の心に徹して來た。深夜人去り、草木眠つて居る中に、たゞ暗中に端坐して鐵鎚を振つて居る了海の姿が、墨の如き闇にあつて尚實之助の心眼に歴々として映つて來た。それはもはや人間の心

菩提心　佛道に入る心。

顫慄　ふるひ。

ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつて、たゞ鐵鎚を振つて居る勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は握りしめた太刀の柄が、何時の間にか緩んで居るのを覺えた。彼はふと自分自身を顧みた。既に佛心を得て、衆生の爲に碎身の苦を嘗めて居る高德の聖に對し、深夜の闇に乘じて、おひはぎの如く、獸の如く瞋恚の劍を拔きそばめて近寄らうとする自分を顧みると、彼は强い顫慄が身體を傳うて流れるのを感じた。

洞窟を搖がせる力强い鎚の音と、悲壯な念佛の聲とは、實之助の心を散々に打碎いてしまつた。彼は潔く竣功の日を待ち、彼との約束の果たさるゝのを待つより外はないと思つた。

實之助は深い感激を懷きながら、洞外の月光を目指して、洞窟の外に這出たのである。

その事があつてから、實之助は洞窟の外の木小屋の內に朝夕

を送りながら、心靜に刻貫の成就されるのを待つて居た。彼はもう老僧を討つて立退かうと云ふやうな嶮しい心は、少しも持つて居なかつた。了海がその一生の大願を成就する日を待つてやらうと思つて居た。

彼一人が爲すこともなく暮して居るにも拘はらず、周圍の石工達は寸陰をも惜しんで懸命に働いて居た。了海の不斷の精神が何時の間にか石工達の心にも沁渡つて居るやうであつた。彼等は實之助に對して、朝夕快い挨拶を送つた。

「お武家樣、今日は何處へおはせられた。」

などと、問ひかけられる度に、實之助は自分の所在のない生活が氣になつて居た。周圍の人々が、總べて狂氣のやうに働いて居る中に、自分一人漠然と暮して居る事が、彼に心苦しく思はれ始

一臂の力を盡す。

めた。二月もかうして漠然と暮して居る中に、彼はふと思ひ付いた。かうして爲す事もなく待つて居るよりも、自分も此の大業に一臂の力を盡すことに依つて、幾何でも成就の日が早められるのではないかと思つた。それと同時に、復讐の期日が縮められるのではないかと思つた。さう思ふと、彼はその日から、石工の群に伍して、鎚を振ひ始めたのである。

かうして、敵と敵とが相並んで鎚を下し始めたのである。實之助は本懷を達する日が一日も早かれと懸命に鎚を振ふのであつた。了海は實之助が出現してからは、一日も早く大願を成就して、惜しからぬ命を孝子の手に授けてやりたいと思つたのであらう。彼は今迄にも見られなかつたやうな烈しさで、狂人のやうに岩壁を打碎いて行くのであつた。

その中に、月が去り月が來た。最初は自分自身の爲に鎚を振

阿修羅　惡鬼の義。

延享三年　第百十四代櫻町天皇の年號。（1746）

九つ　十二時。

つて居た實之助も、此の刳貫の大業を爲しがひのある仕事であるとさへ思ふやうになつて居た。阿修羅の如く鎚を振つて居る了海の姿を見て居ると、彼はその勇猛心に動かされて、兎もすれば讐敵の恨を忘れがちであつた。

石工どもが晝の疲を休めて居る眞夜中にも、此の敵同志は默默として鎚を振ふことなどもあつた。

それは了海が樋田の岩壁に第一の鎚を下してから丁度二十一年目、實之助が了海に廻り逢うてから一年六箇月を經た延享三年九月十日の夜であつた。此の夜も石工どもは悉く小屋に退いて了海と實之助のみが終日の疲勞にめげず、懸命に鎚を振つて居た。その夜九つに近い頃であつた。了海が力を籠めて振下した鎚が、朽木を打つが如く何の手答もなかつたので、思はず力餘つて、鎚を持つた右の掌が岩に當つた。その時であつた。

彼は「あつ」と思はず聲を揚げた。了海の朦朧たる老眼にも紛れなく、その鎚に破られた小さい穴から、月の光に照された山國川の姿が歴々と映つたのである。了海は「おう」と全身を顫はせるやうな名狀しがたき叫聲を擧げたかと思ふと、それにつゞいて狂したかと思はれるやうな歡喜の泣笑が洞窟を物凄く搖らめかしたのである。

「實之助殿御覽なされい。二十一年の大誓願、今宵端なくも成就いたした。」

かう云ひながら、了海は實之助の手を取つて、小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黑ずんだ土の見えるのは岩に沿ふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とは、そこに手を取合うて大歡喜の涙に咽んだのであるが、暫くすると了海は身を退つて、

法悅　信仰より生ずる心中のよろこび。

「いざ實之助殿、約束の日ぢや、お斬りなされい。かゝる法悅の最中に往生致すなれば、未來は淨土に生るゝこと疑なしぢや。いざお斬りなされい。明日ともなれば、石工どもが妨を致さう。いざお斬りなされい。」

と、彼のしわがれた聲が洞窟の夜の空氣に響いた。が、實之助は了海の前に手を拱いて坐つたまゝ、涙に咽んで居るばかりであつた。心の底から湧出づる歡喜に響く凋びた老僧の顏を見て居ると、彼を敵として殺す事などは思ひ及ばぬ事であつた。敵を討つなどと云ふ心よりも、此の贏い人間の二つの腕に依つて、成しとげられた偉業に對する驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。彼はゐざり寄りながら、再び、老僧の手を取つた。二人は其處に總べてを忘れて、感激の涙に何時迄も浸つて居たのであつた。

（菊池寛傑作集第壹卷）